

中國4年12月1日發行 香港/澳門77卷第12号(每月1日發行) 創刊21年7月22日第3期(原美次物承誌)

# 春燈

2022 December

12月号



安住 敦の句

稚く青くまだ考へる葦でなし

『柿の木坂雑唱』 昭和五十五年

この句は近江八景の一つ「堅田の落雁」で有名な浮御堂での作とある。浮御堂は琵琶湖の南西岸の湖上に突き出た堅田の満月寺付近にある宝形造りの小堂で、雁の群が舞い降りる情景で有名である。

又、フランスの哲学者パスカルは「人間は考える葦である」と唱え、「宇宙を包むことが出来る」とある。この句は敦先生から若い人への応援句と言えよう。

田 嶋 洋 子

安住 敦の句

枯蓮を見てゐることに長くは耐へず

〔歴日抄〕昭和四十年

「この年、久保田先生鎌倉をひきあげて湯島天神町に移るも訪ねて不在のこと多し、すなはち不忍池へまはる」の詞書のある枯蓮四句の四句目。昭和三十年の作。不忍池の枯れ尽くし果てて葉は破れ茎は折れ曲がっている蓮を目にして、敦師は「先生の何か不安定な日々を思うとわたくしまで耐えられない思いだった」と述懐している。「長くは耐へず」に先生への気遣いの深さがある。

田中嘉信

# 燈下集



○ 西川保子

眼中にあふれしめたり大花野

菓子の銘は「吉野拾遺」や二日月

今日の月ひとり仰ぐもよしとせり

一陶工逝けりかりがね寒きころ

遣されし白磁の香炉秋澄めり

○ 名譽主宰 安立公彦

玲瓏の秋月仰ぐ友在らず(悼・若葉さん二句)

秋澄むやあるじ無き席なほ更に

はや点る一番星や九月尽

曼殊沙華残る夕日に身を寄する

黄色の柚子手に馴染む故山かな

○ 主宰 鈴木直充

醉芙蓉風に湯の香のありにけり

掃除機の働きづめの厄日かな

みみしひを装ふ爺や氷頭臙

この道のほかに道なし水澄めり

行く秋や谿の底より水の音

○ 佐藤信子

月今宵遠き記憶に灯をともし

行く雲にとりのこされて秋の塔

ふつくらとご飯を炊いて敬老日

母とよく坐りし石や草の花

今朝も来るつがひの鴉九月尽

○ 園部落郷

湯沢市に祇園町あり月に三味

源氏名は夕霧新酒酌み交はす

齎る程なり柚の酌む猿酒

月にイフ棒稲架並めて兵馬桶

松茸は故郷のかをりいとこ会

## 〈受賞のことば〉

中村 朋子



### 人生を俳句に

歴史ある春星賞を賜り、感激と同時に身の引き締まる思いでいっぱいです。鈴木直充主宰、並びに選考委員の皆様ありがとうございます。また、ご指導いただいた先輩の皆様へ感謝いたします。

子育てが一段落してから俳句に興味を持ち始め、従姉の久保久子の勧めで「春燈」に入会させていただきました。平成二十六年より池袋句会に参加し、現在、三上程子さんのご指導を受けております。句会での一つ一つが具体的に新しい刺激となり、次の句作への糧となっております。

好きな街銀座を句にしましたが、二十句を作品にしていく作業は自分と向き合う時間でもありました。これからも努力を重ね精進してまいりたく存じます。

ご指導宜しくお願いいたします。

### 略歴

昭和二十八年 東京都新宿区生

平成二十五年 「春燈」入会

平成二十六年 春燈池袋句会

俳人協会会員

東京都目黒区在住

春星賞受賞作（20句）

大時計

中村 朋子

たまゆらの風となりたる春シヨール  
うららかや試書きして買はぬベン  
白木にほふ幸稻荷初つばめ  
万愚節懲りぬ女でありにけり  
花ぐもり歩けば癒ゆる疲れかな  
大時計揺らぐ炎暑の交差点  
水打つて名を知らぬ草いとほしむ  
室外機うなる路地うら蟻の列

天井に声の渦巻くピヤホール  
白シャツや透ける上腕二頭筋  
ゆつたりと注ぐワインや星まつり  
マネキンのながむる虚空終戦日  
つづれさせ文壇バーを覗きけり  
秋霖や画廊の金のノブの冷  
ミキモトの聖樹に人を待ちし日も  
迫りくるイルミネーション雪催  
大歳の星へ連なる尾灯かな  
行列の一番さいご春隣  
髪切つて踏み出す一步冬すみれ  
寒晴や永久を見つむる大時計